

2024年 JRC/全日本ラリー選手権  
第7戦 ラリー北海道

2024年の全日本ラリー選手権でも主要チーム&ドライバーをサポート！  
ラリー北海道では奴田原・東選手組が3位、鎌田・松本選手組が5位に入賞



## ■概要/Outline

国内外のレースシーンで活動する PIAA はラリー競技においても定着。WRC（世界ラリー選手権）では TOYOTA GAZOO Racing WRT を筆頭に、これまでスバル、三菱、M-SPORT（FORD）、BMW MINI、HYUNDAI、Citroën など数多くのトップチームをサポートしてきたほか、国内最高峰シリーズの JRC（全日本ラリー選手権）においても 1982 年にタスカエンジニアリングの協力を得て、横浜ゴムと ADVAN-PIAA Rally Team を結成して以来、アドバンのワークスドライバーとともに数々のタイトルを獲得している。

その活動は 2024 年も数多くのサポートチームおよびサポートドライバーが最高峰の JN1 クラスで活躍。9 月 6 日～8 日に北海道帯広市を舞台に開催された第 7 戦「ラリー北海道」でも PIAA ユーザーたちが素晴らしい走りを披露していた。

なかでも抜群のパフォーマンスを披露したのが、TOYOTA GAZOO Racing AUSTRALIA で 56 号車「GR YARIS Rally2」を駆るハリー・ベイツにほかならない。ラリー北海道は初参戦だったが、計 4 回の SS ウインを獲得し、最高峰の JN1 クラスで 2 位に入賞。ちなみに GR Yaris Rally2 の標準パーツとしてフロントバンパーのコーナーリングランプには P I A A 製の LED が設定されています。さらに NUTAHARA Rally Team で 54 号車「ADVAN KTMS GR ヤリス ラリー2」のステアリングを握る奴田原文雄選手・東駿吾選手組もコンスタントな走りで 3 位入賞を果たし、今季 3 度目の表彰台を獲得したほか、WinmaX RALLY TEAM で 58 号車「WinmaX DL シムス WRX STI」をドライブする鎌田卓麻選手も 5 位入賞を果たした。



そのほか、JN2 クラスに目を向ければ ARTA オートバックスラリーチームで 66 号車「ARTA オートバックス GR ヤリス」のステアリングを握る石川昌平選手が JN2 クラスで初優勝を獲得。さらに同時開催の XCR スプリントカップ北海道シリーズ第 4 戦ではチーム岩手トヨタ GEOLANDER で 118 号車「岩手トヨタ GEOLANDER ライズ」のステアリングを握る埴郁夫選手が OP-XC3 クラスで 2 位入賞を果たすなど、2024 年のラリー北海道でも各クラスで PIAA ユーザーが活躍していた。



JN2 クラス初優勝の石川昌平選手、大倉瞳選手組



トヨタライズで参戦の埴郁夫選手、佐竹尚子選手組

## ■レポート/Report

2024年の全日本ラリー選手権は早くも終盤戦へ突入、9月6日～8日には北海道帯広市を舞台に第7戦「ラリー北海道」が開催され、各クラスで激しいタイム争いが展開されていた。

そのなかで注目を集めた存在が、トヨタのワークスチームとして全日本ラリー選手権のJN1クラスに参戦しているTOYOTA GAZOO Racing WRJだと言えるだろう。同チームはスポーツ自動変速機、DATを搭載した「GR YARIS GR4 Rally DAT」を投入しており、開発ドライバーの眞貝知志選手・安藤裕一選手組が安定した走りを披露。改造範囲が狭いうえに、車両重量が重いことから苦しい戦いを強いられながらも、眞貝のドライビングにより第2戦のツール・ド・九州から第5戦のモンレーにかけて4戦連続で入賞している。

ラリー北海道にはエースとして60号車を駆る眞貝に加えて、2024年はGRヤリスを武器に全日本ラリー選手権のJN2クラスに参戦し、第5戦のモンレーを制した大竹直生選手が61号車「GR YARIS GR4 Rally」でJN1クラスにスポット参戦。このようにTOYOTA GAZOO Racing WRJはDAT/MTと仕様の異なる2台で国内屈指の高速グラベル戦にチャレンジしたのだが、苦しい戦いを強いられることとなった。



コンスタントな走りでクラス10番手につけていた眞貝選手だったが、SS6のフィニッシュ後のリフェールでオイル漏れが発生したことから眞貝選手はその日の走行を断念。さらにSS1で7番手タイムをマークしながらも、SS2でロールオーバーを喫し、クラス9番手に後退することとなった。

それでも大竹選手は、SS4で7番手タイム、SS5、SS6、SS7で6番手タイム、SS8で5番手タイムをマークするなどペースアップを果たし、クラス5番手まで追い上げてレグ1をフィニッシュ。さらにレグ2でもSS9で3番手タイムをマークするなど素晴らしい走りを見せていたのだが、残念ながら最終ステージとなるSS12でトラブルが発生、マシンが炎上してしまい、リタイアすることになったのである。



このようにTOYOTA GAZOO Racing WRJにとって2024年のラリー北海道は悔しいリザルトとなったが、そのほか、PIAAのサポートチーム&サポートドライバーが活躍。なかでも素晴らしい走

りを見せたのが、NUTAHARA Rally Teamで54号車「ADVAN KTMS GR ヤリスラリー2」を駆る奴田原文雄選手だと言えるだろう。今シーズンより国際規定モデルのGR ヤリス Rally2 を投入し、JN1 クラスに復帰した奴田原選手は第4戦のラリー丹後で3位、さらに第6戦のラリー・カムイでも3位入賞を果たすなど、2度の表彰台を獲得。その勢いはラリー北海道でも健在で、SS2でベストタイムを叩き出すなどラリー序盤から好タイムを連発した奴田原選手はレグ1を3番手でフィニッシュしていた。翌日のレグ2でも安定した走りを披露した奴田原選手はポジションをキープ、3位でシーズン3度目のポディウムフィニッシュを達成した。



帯広駅前のセレモニアルスタート



総合3位表彰台の奴田原文雄選手、東駿吾選手組

この奴田原選手に続いたのが、WinmaX RALLY TEAMで58号車「WinmaX DL シムス WRX STI」のステアリングを握る鎌田卓麻選手だった。鎌田選手のWRXは車両重量が重いことから、厳しい戦いを強いられてきたが、それでも第5戦のモンレーおよび第6戦のラリー・カムイで殊勲の6位入賞を果たすなど粘り強い走りでポイントを獲得してきた。その鎌田選手xWRXのパフォーマンスはラリー北海道も健在で、サバイバルラリーが展開されるなか、鎌田選手は6番手でレグ1をフィニッシュ。



セレモニアルスタートのSUBARU WRX STI



ナイトステージが無い大会でもPIAAランプを装着頂きました

さらにレグ2では前述のとおり、TOYOTA GAZOO Racing WRJの大竹がリタイアしたことで、鎌田選手は今季ベストリザルトとなる5位でラリー北海道をフィニッシュした。

また TOYOTA GAZOO Racing AUSTRALIA の56号車「GR YARIS Rally2」で、ラリー北海道にスポット参戦を果たしたハリー・ベイツ選手もPIAAユーザーとして活躍している。ラリー北海道は初参戦だったが、SS1でベストタイムを叩き出すなど素晴らしい走りでレグ1を2番手でフィニッシュ。さらにレグ2でも3回のSSウインを獲得し、2位入賞でポディウムフィニッシュを達成した。

そのほか、MATEX-AQTEC RALLY TEAMで、59号車「MATEX-AQTEC DL GR ヤリス」を

駆る柳澤宏至選手・竹下紀子選手組、KAYABA Rally Team で 63 号車「カヤバ GR ヤリス」を駆る石黒一暢選手も PIAA のサポートチーム&サポートドライバーとしてシーズンを通して活躍。ラリー北海道で 63 号車の石黒選手はリタイアに終わったが、59 号車の柳澤選手が 7 位で完走を果たした。



MATEX-AQTEC DL GR ヤリス 柳沢選手、竹下選手組 カヤバ GR ヤリス 石原選手、穴井選手組

一方、JN2 クラスに目を向ければ石川昌平選手を起用し、66 号車「ARTA オートボックス GR ヤリス」を投入する ARTA オートボックスラリーチームも PIAA のサポートチームで、2 回の SS ウィンを獲得し、レグ1 をトップでフィニッシュ。レグ2 でもコンスタントな走りでポジションをキープし、JN2 クラスで初優勝を獲得した。



JN2 クラス初優勝 ARTA オートボックスラリーチームの GR ヤリス 石川選手、大倉選手組

またラリー北海道で注目を集めていたのだが、全日本ラリー選手権と同時開催で行われた XCR スプリントカップ北海道の第4戦で、SUV やピックアップトラックが豪快な走りを披露。そのなかで最も注目を集めていたのが、哀川翔総監督率いる FLEX SHOWAIKAWA Racing with TOYO TIRE の 110 号車「FLEX 翔 TOYOTIRES トライトン」で、ドリフト競技やクロスカントリーラリーで活躍する川畑真人選手が PIAA のランプシステムを採用したトライトンで OP-XC2 クラスに参戦していた。残念ながら 110 号車の川畑選手は SS2 でロールオーバーを喫し、レグ1 を離脱することとなったが、レグ2 で再出走を果たすと SS9 でベストタイムをマークするほか、SS11 で 2 番手タイムをマークするなど素晴らしいパフォーマンスを披露していた。



ぶっつけ本番デビューの三菱トライトン

哀川 翔 総監督も現地で指揮！

さらに HASEPRO RACING で 114 号車「ハセプロトーヨータイヤ GN アウトランダー」を投入する長谷川智秀選手も PIAA のサポートチーム&サポートドライバーで、ロングステージではバッテリーのオーバーヒートによるパワー不足に苦戦を強いられながらも、OP-XC2 クラスで 7 位完走。



ハセプロトーヨータイヤ GN アウトランダー 長谷川選手、厚地選手組

また、チーム岩手トヨタ GEOLANDER で 118 号車「岩手トヨタ GEOLANDER ライズ」を駆る埜郁夫選手も PIAA のサポートチーム&サポートドライバーで、PIAA の LED をフロントバンパーに組み込んだコンパクト SUV を武器に安定した走りを披露、OP-XC3 クラスで 2 位入賞を果たした。



XCR スプリントカップ XC3 クラス優勝 埜選手、佐竹選手組 岩手トヨタ GEOLANDER ライズ

このように過酷なハイスピードグラベル戦でも、各クラスで PIAA ユーザーが活躍しており、数多くのファンの注目を集めていた。

## ■フォトギャラリー／PHOTO GALLERY



NUTAHARA RALLY TEAM メンバー



Day1 終了後にサービス（車両整備）



MATEX-AQTEC DL GR ヤリス



WinmaX DL シムス WRX STI



Day1 で破損したマシンを直して Day2 に備える FLEX SHOW AIKAWA Racing with TOYO TIRES トライトン



PIAA LED ランプを装着しスタートする FLEX SHOW AIKAWA Racing with TOYO TIRES トライトン



PIAA 撥水ワイパーは多くのマシンに装着頂きました



TGR-WRJ 大竹直生選手、橋本美咲選手組



GR ヤリス GR4RallyDAT 眞貝知志選手、安藤裕一選手組



サービスパークイベント会場に展示した TOYO TIRES トライトンに PIAA LED、Terzo ルーフキャリアを装着